

糸を染め布に織り上げる 織物業

桐生は“織都1300年”って言われていて、今から1300年も前の奈良時代から織物が盛んだったんだって。桐生に織物の技術を伝えたときれる“白瀧姫伝説”というのがあるよ。



白瀧神社 (桐生市)

京都から織物技術を伝えたという「白瀧姫」をまつる神社です。この織姫の伝説は江戸時代に確立し、絹商人や機織り女たちの信仰を集めました。

境内には、耳をあてると機音が聞こえたという「降臨石」と呼ばれる大岩や、樹齢300年以上といわれるケヤキがあり、神秘的な雰囲気がただよっています。



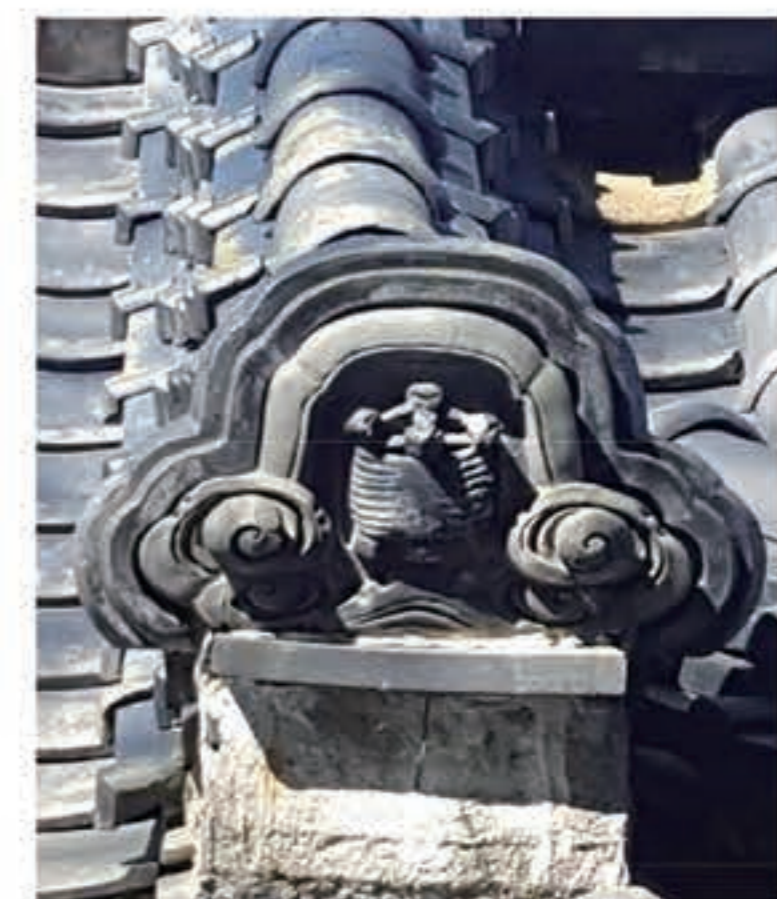
「降臨石」: 耳をあてると、中から機音が聞こえてくるという言い伝えがあります。

しかし、不心得者が雪駄をはいて上がったから、その音が聞こえなくなってしまったという言い伝えもあります。



このケヤキは、平成8年3月に桐生市の天然記念物に指定されました。

指定時には、樹高20メートル、目通り直径190センチメートル、推定樹齢300年以上でした。



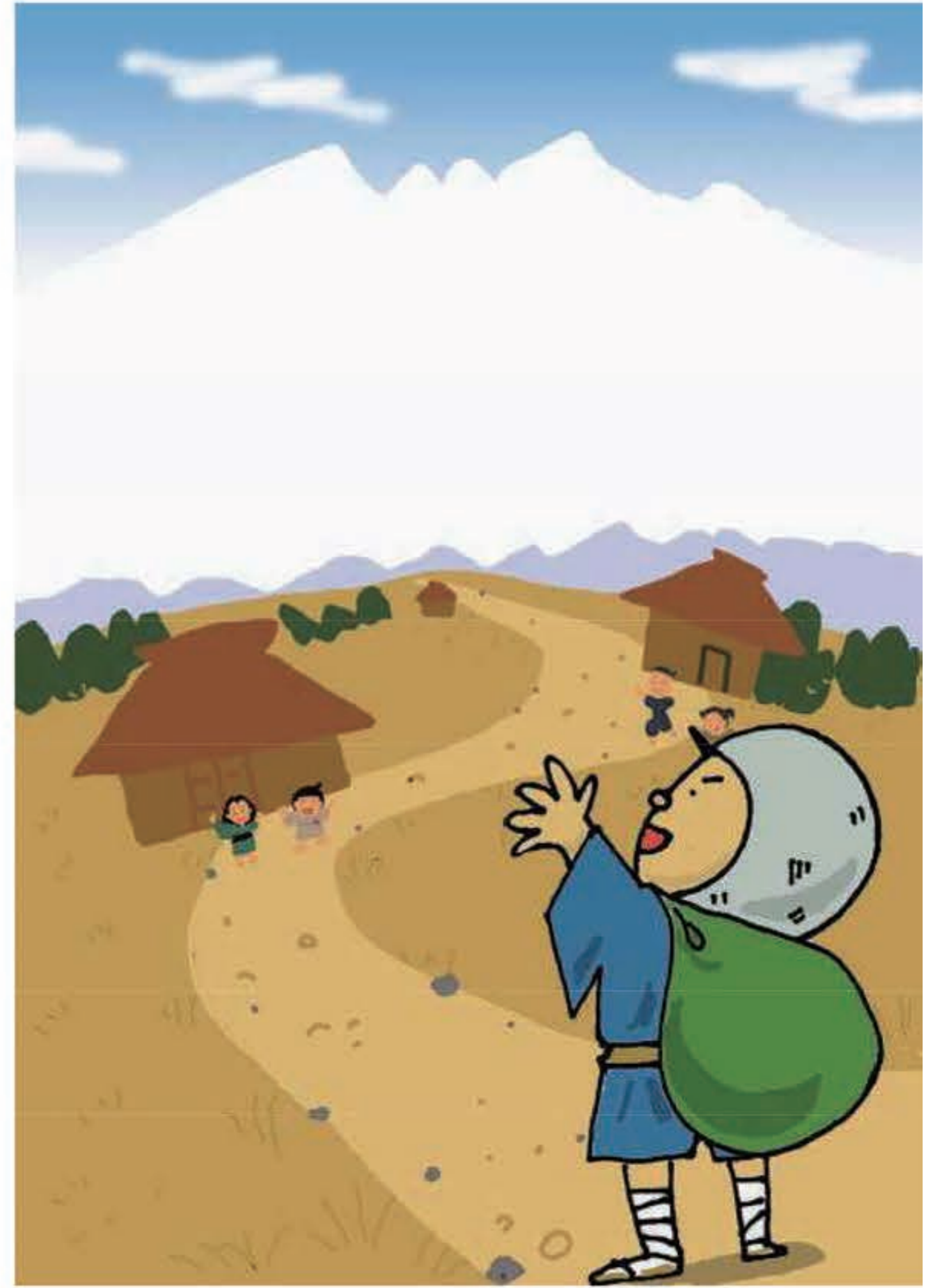
鬼瓦の糸杵模様は、織物に關係の深い神社であることを物語っています。

しらたきひめでんせつ
白瀧姫伝説

むかし、上野国山田郡というところに小さな村
がありました。この村に、たいそう働き者の久助
という男がいて、朝早くから日が暮れるまで
一生懸命に働いていました。

ある日の夕暮れ、名主様の家に村の人たちが
集まりました。このころは、関東の国から数人の
農夫が選ばれて、一年間、京都の宮中のお庭
掃除をする習わしになっていました。今日は、
来年京都に行く農夫を選ぶ日だったのです。そし
て、働き者の久助が選ばれたのでした。

それから数日後。その日は、朝から冷たい空っ
風が吹いていて、赤城山は雪で真っ白でした。久
助は、村の人たちに見送られながら、京都へ旅立
っていきました。



途中の道は、追いはぎや山賊が出るとい
うわさもあり、あたりに気をつけながら行
きました。いくつもの峠を越え、川を渡り、よ
うやく京都に着いたころには、もう梅の花が
咲いていました。ウグイスの声が聞こえ、こ
ちよい春の風が吹いていました。久助は、京
都の美しさに目をみはりました。

宮中に着くと、さっそくお庭の掃除を命ぜ
られました。広い庭には、池があり、色鮮や
かな鯉が口をパクパクさせていました。

あるとき、一枚の短冊が池に浮かんでいました。久助が拾い上げてみると、

「吾妻より 山田のからすが飛び来たり

羽ばたきをして 庭ぞはきける」

(東の方から、カラスのような汚い身なりをした男が来て、庭掃除をしているよ。)

と、その短冊には、久助をばかにしたような和歌が書かれていました。

官女たちは、それを見て大声で笑っていました。そのころの農民は、読み書きできる人はあまりいませんでした。



久助は、官女たちのそばに行き、筆と短冊を借りて、平然と返歌をしました。

「飛び立てば 雲井の空に羽を伸して 大宮人を 目の下に見る」

(下品な私のようなカラスでも、飛び立てば、あなた方高貴な人たちを自由に見下げることができるのですよ。)

と詠んだところ、今まで笑っていた官女たちは、話もできなくなっていました。そして、その短冊を書いた官女 白瀧姫は、恥ずかしさのあまり、部屋の奥へ急いで引き込んでしまいました。この白瀧姫は、右大臣の次女で、宮中でもたいそう美しいと評判でした。



それから、久助は毎日毎日、お庭掃除や植木の手入れなど、熱心に働きました。

ところが、短冊のことがあってから、白瀧姫の姿がすだれの間からちらほら見えるたびに、その美しさが気になって仕事の手が止まってしまうようになってしまいました。

そして久助は、白瀧姫を恋するがあまり、とうとう寝込んでしまいました。しかし、かなわぬ恋と知りながら、どうしても自分の思いを伝えたくなくなった久助は、ある日、白瀧姫に和歌を送りました。

「雲の上 目には見ゆれど白瀧の 八重に思いと 落ちぬ君かな」

(雲よりはるか高いところに見える高貴なあなたを、これだけたくさん恋しているけれど、あなたは私の気持ちをわかってはくださらないのですね。)

久助は、白瀧姫に三度和歌を送りましたが、姫からの返歌はありませんでした。久助は一か月くらいふせっていましたが、少しずつ元気を取り戻し、またお庭掃除を始めました。

宮中に来てから一年が過ぎ、お勤め交代の時期がやってきました。下働きをした人たちが集められ、帝(天皇)からねぎらいのお言葉とお料理やお酒などをいただきました。

久助は、帝の前に進み出て、「おらあ、何もありません。ただ、白瀧姫をお嫁にいただけますれば、ありがたき幸せです」と恐る恐る申し上げました。

すると、そばにひかえた公卿百官殿上人たちが、一度にどっと大笑いをしました。そして、

「下郎の分際で、かなわぬ願いを言うものぞ」と、あきれ顔をしました。



あたりのざわめきが静まったころ、一人の官女が現われ、三枚の短冊を帝に手渡しました。

その短冊には、久助が病床から白瀧姫に送った和歌が詠まれてありました。

それを見た帝は、「かわいそうに、下郎の身ながら、たいそう優しい心をしておる」と、久助に同情して、「ならば歌合せをし、もし、そのほうが勝ったならば、姫を嫁に進ぜよう」とおっしゃいました。久助は、夢ではないかと、自分の耳を疑いました。

白瀧姫も、ひそかに久助に思いを寄せていたので、帝のお言葉をたいそう喜びました。



紫宸殿で歌合せが始まりました。まず、白瀧姫より一首

「照り続き 山田の稲の枯れはてて
何を種とて 命つくらん」

(日照りが続き、あなたの里の稲が枯れてしまったならば、何をたよりに生きていくのでしょうか。)

と詠むと、山田の久助は、

「照り続き 山田の稲のこかれなば
落ちて助けよ 白滝の水」

(私の里の稲が枯れてしまうならば、あなたがお嫁に来て、白滝の水のごとく、私の心をいやしてください。)

と、白瀧姫を白滝の水にたとえて返歌をしました。

それを聞いた帝をはじめ、そこにひかえた人たちは、たいそう感激し、言葉にならないため息が聞こえてきました。



歌合せで勝った久助は、約束どおり白瀧姫を花嫁にして、連れ立って久助の里へ帰っていきました。

左に溪流、右に小高い山のある峠に二人の姿が見えたのは、それから約一か月たってからでした。「とうとう着いたぞ。すぐ下に見えるのが、おらたちの村だ。」と、久助はうれしそうにさげびました。

すると、「かなたに見える山は、たいそう京の小倉に似てます。」白瀧姫は、静かにつぶやきました。「そんじゃあ、その小倉に似た山を、仁田山とし、この峠を小倉峠とするべえ」ということになり、今でもそう呼ばれているそうです。

二人を迎えた村の人たちは、大騒ぎとなり、さっそくみんな仁田山郷岩本というところに、仮り家を建ててやりました。



白瀧姫は、宮中で手なぐさみに覚えた、養蚕、糸繰り、機織りの業を、仁田山の人たちに教え、やがて朝廷に絹織物を献上するほどになりました。これが、のちの桐生織物の源となり、桐生をはじめ、その近郷近在までも、養蚕、製糸、織物産業として発展していきました。

やがて白瀧姫は、一男子をもうけましたが、病気にかかり、久助の介抱もむなしく

「水の泡 消える我が身は白滝の

今は玉散る 峰の岩本」

(水の泡が消えるように私のはかない命。今では白滝の水

のごとく涙があふれ、峰の岩本に散っていきます。)

と詠み、静かにこの世を去りました。

上野国山田郡上仁田山村、現在の群馬県桐生市川内町の白瀧神社には、白瀧姫の御魂が、機神様、夫婦縁結びの神様として祭られています。

境内には、直径十メートルもある大きな石があり、その小さな穴に耳を当てると、「カラン、トントン、カラン、トントン…」と、中から機音が聞こえてくるということです。

(「桐生織姫伝説 白瀧姫物語(文・松崎寛)」から抜粋しました。)

生糸は、はじめに何本か撚り合わせるんだよ。そうすると糸が強く

なったり、織りあがったときの風合いがよくなったりするんさ。

この工場は、日本一の撚糸工場だったんだよ。でも働いていたの

は“かかあ”ではなく、若い女の子だったよ。



旧模範工場桐生撚糸合資会社事務所棟(桐生市)

(現:絹撚記念館) (桐生市重要文化財)

明治35年(1902)に設立された旧模範工場桐生撚糸合資会社はその後、日本絹撚株式会社として日本一の撚糸工場へと発展しました。

当時の従業員は1,000人を超え、その多くが若い女性たちでした。そこで、初代社長の前原悠一郎は、工場内に学校や厚生施設を設置し、女工たちへ技術のみならず教育も施しました。



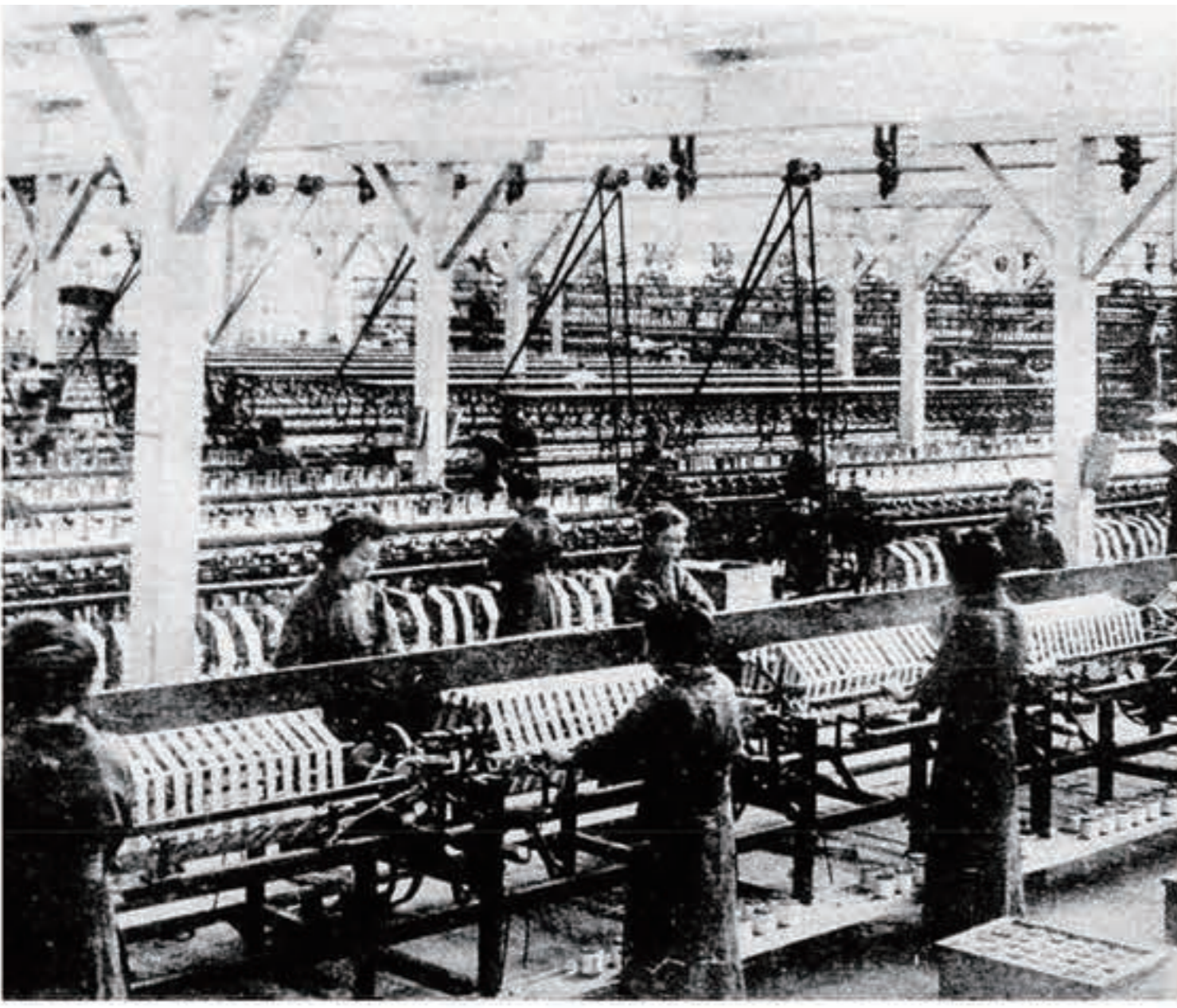
この建物は、大正6年(1917)に建築された日本絹撚株式会社の事務所棟です。県内最古級の洋風石造建造物であり、現在は郷土資料の展示施設として活用されています。



写真中央に「絹撚記念館」の建物が見えます。その左一帯のノコギリ屋根は撚糸工場の建物。中央下の運動場は、社員のためのものでした。

また、絹撚記念館の建物の右側には、従業員の宿舎や学校、食堂などがありました。





こうじょうない ようす
工場内の様子



この集合写真を見てわかるように、
ほとんどが若い女の子です。



群馬県最初の乗用車は、日本絹撚株式会社が
大正7年に購入したもの。車体番号は「群一号」
だったといひます。

花壇手入れ



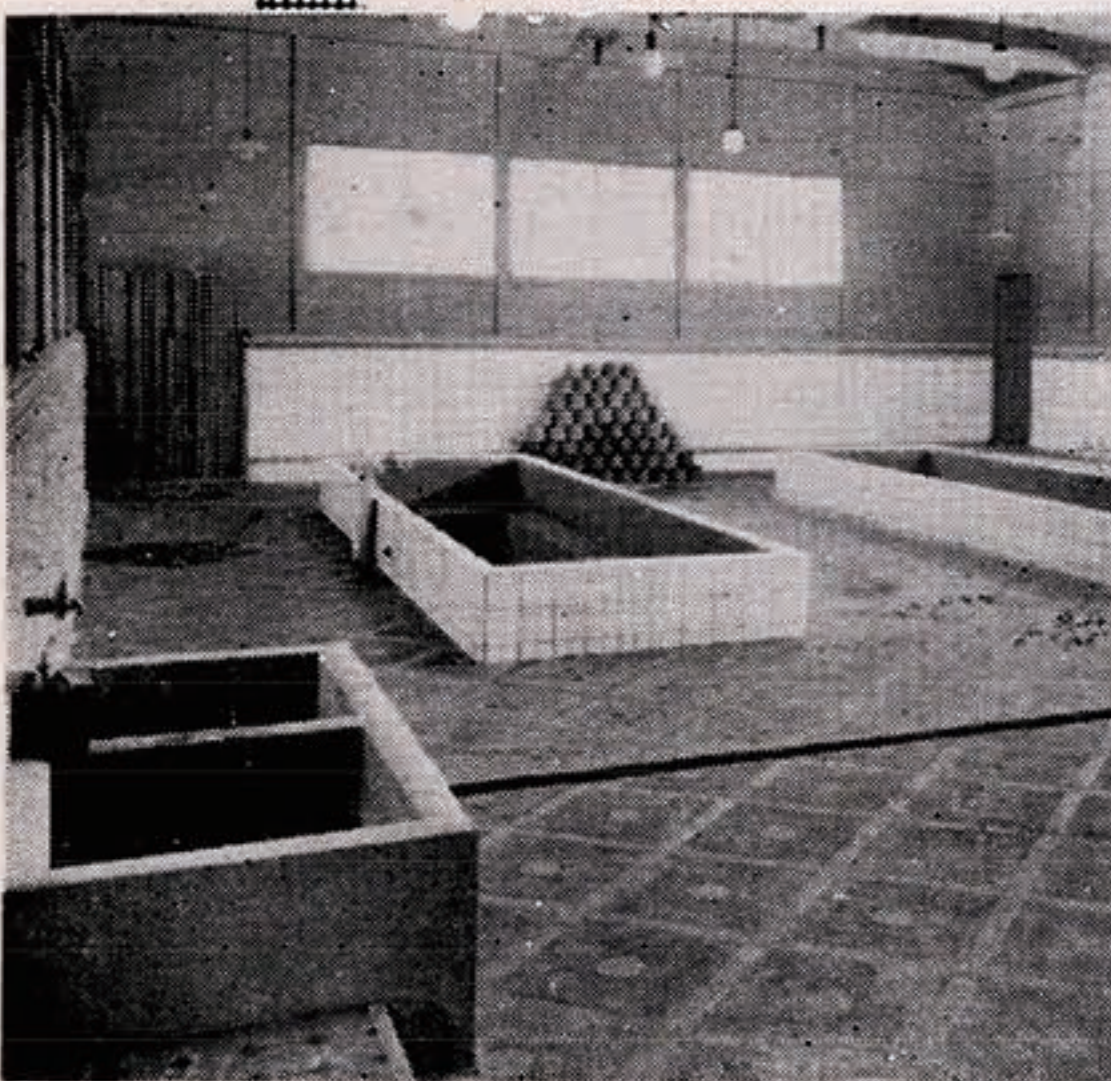
ピンポン練習



女子鼓笛隊



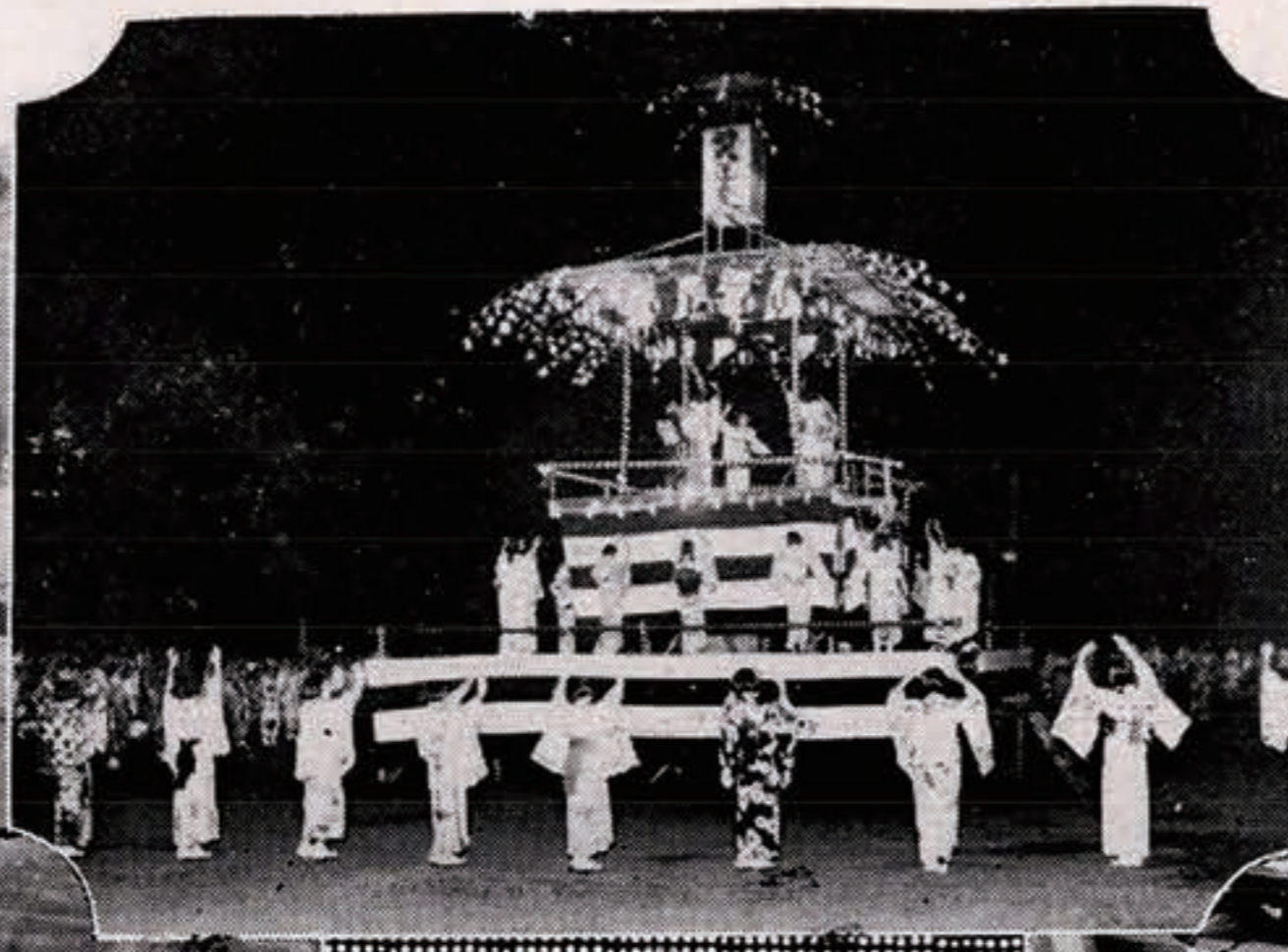
女子浴室



花道練習



舞踊大会



上の写真は、「日本絹撚株式会社 創立40年史」の口絵写真です。
これらの写真からも、日本絹撚株式会社の福利厚生や社員教育の充実ぶりがよくわかります。
このほか、運動会や遠足、社員旅行なども行っていたそうです。

「日本絹撚株式会社 創立40年史」(昭和18年11月10日 発行)より



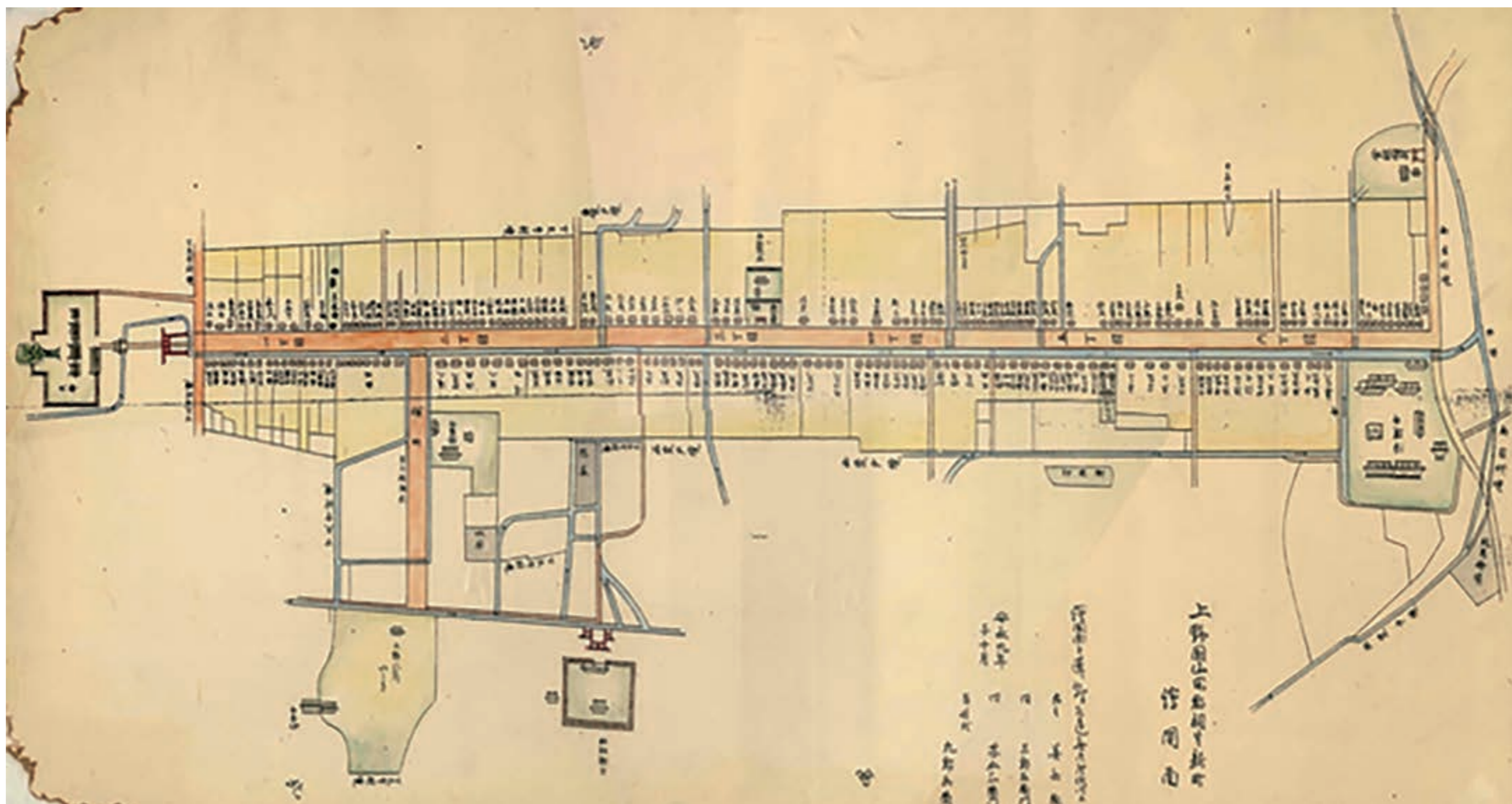
この地区には、撚り屋から染め屋から機屋から、織物関係の
 いろいろな職人がいてね。“かかあ”だけでなく、若い子もいっぱい
 いて、そりゃあにぎやかだったよ。



桐生市桐生新町伝統的建造物群保存地区
 (桐生市) (国重要伝統的建造物群保存地区)

天正9年(1591)に桐生新町が形成されて以
 来、この地区は織物業の中心地として桐生の経済
 発展を支えてきました。桐生の織物業は大正期か
 ら昭和初期に最盛期を迎え、当時の桐生新町の町
 並みには買継商や糸商、呉服商、染物業など織物
 業の店舗などが建ち並びました。

現在も商家とともに織物工場や寄宿舍、銭湯な
 どの建造物が残り、女工の暮らしが偲ばれます。



江戸時代の桐生新町の地図です。地図の左側が北です。一番北にかかれています天満宮から、南
 に向かって本町通りがのびています。一番南には浄運寺がかかれています。

※ この地区の詳しいことは、「桐生市の重要伝統的建造物群保存地区【キッズ
 ページ】」(右のQRコード)をご覧ください。



桐生織は、糸の段階で染めるんさ。明治時代に化学染料が外国

から入ってくると、桐生の熱心な若者は前橋の医学校まで歩いて

通って、染料の勉強をしたんだって。その医学校の建物は、移築さ

れて「桐生明治館」って呼ばれてるよ。



後藤織物 (桐生市) (国登録有形文化財)

洋式染色技術を導入し織物の改良を行うなど、桐生織物業に貢献してきた後藤織物は、熟練の女性従業員が従事し、帯地などの織物生産を行って

いました。現存する木造のノコギリ屋根工場のほか倉庫や釜場などは、織物生産のシステムをそのまま現しています。



後藤織物の表門



大量の紋紙。倉庫にはこの何倍もの紋紙が保管されています。



でも上の写真の力織機には紋紙がない?! この機械の紋紙は電子媒体でした。



後藤織物の建物は、読売テレビ・日本テレビ系スペシャルドラマ「愛を乞うひと」(平成29年(2017))のロケでも使われました。「愛を乞うひと」は、篠原涼子さんの一人二役で話題になった「文部科学省選定社会教育(教養)青年・成人向きドラマ」



「桐生明治館」(国重要文化財 旧群馬県衛生所)

明治11年(1878)、前橋市に衛生所兼医学校として建設。

昭和3年(1928)、相生村役場として現在地(桐生市相生町二丁目)に移築。



江戸時代末期から明治、大正と、様々な技術革新や商品開発、

販路の拡大などがあって、桐生の織物は大きく発展していった

んさ。織物参考館“紫”では、そうした展示が見学できるよ。



織物参考館“紫”

(桐生市)(国登録有形文化財)

「織物参考館“紫”」は、高級織物であるお召しの技術を今に伝える森秀織物の旧釜場、旧整経場、旧ノコギリ屋根工場などを利用した体験型織物博物館の名称です。

館内では、女性従業員による染織や手織の体験、織物の歴史の学習、古い織機や今も現役で動いている織機などを見学することができます。



「新宿の水車群」：水車を動力とした八丁撚糸機が考案されてからは、赤岩用水沿いの新宿を中心として、撚糸・糸繰用水車の数が増えました。明治30年(1897)頃、新宿には150基もの水車が回っていたそうです。

「思い出のアルバム 桐生」(昭和57年9月4日 あかぎ出版発行)より



(織物参考館“紫”所蔵)

「八丁撚糸機」：この八丁撚糸機は、右と左で逆向きの撚りが一度にできるそうです。



(織物参考館“紫”所蔵)

「空引機」：機台に登った空引工が紋綜統を上下させ、別の人が緯糸を入れるなど、二人で協力して紋織物を織っていく機。複雑な模様が織れます。

「力織機」：動力によって動かす織機のこと。



(織物参考館“紫”所蔵)



何でもそうだけど、よく売れるようになると桐生織のまねをした

製品などが出回ってくるもんさ。 そうした粗製乱造防止や技術

向上を目的として、織物関係の同業者の組合ができたんさ。



桐生織物会館旧館 (桐生市)(国登録有形文化財)

昭和9年(1934)に桐生織物向上のため設立された桐生織物同業者組合の事務所です。かつて女子職員が電話交換手やタイプライター事務員などを務め業務を支えました。外壁はスクラッチタイル張、屋根は青緑色の日本洋瓦葺、二階にはステンドグラスを用いて洋風の外観となっています。現在は「桐生織物記念館」として一般公開しており、織物資料展示や販売が行われています。



新築祝いの日、バルコニーはバンザイと歓声につつまれた。

(「思い出のアルバム 桐生」より)



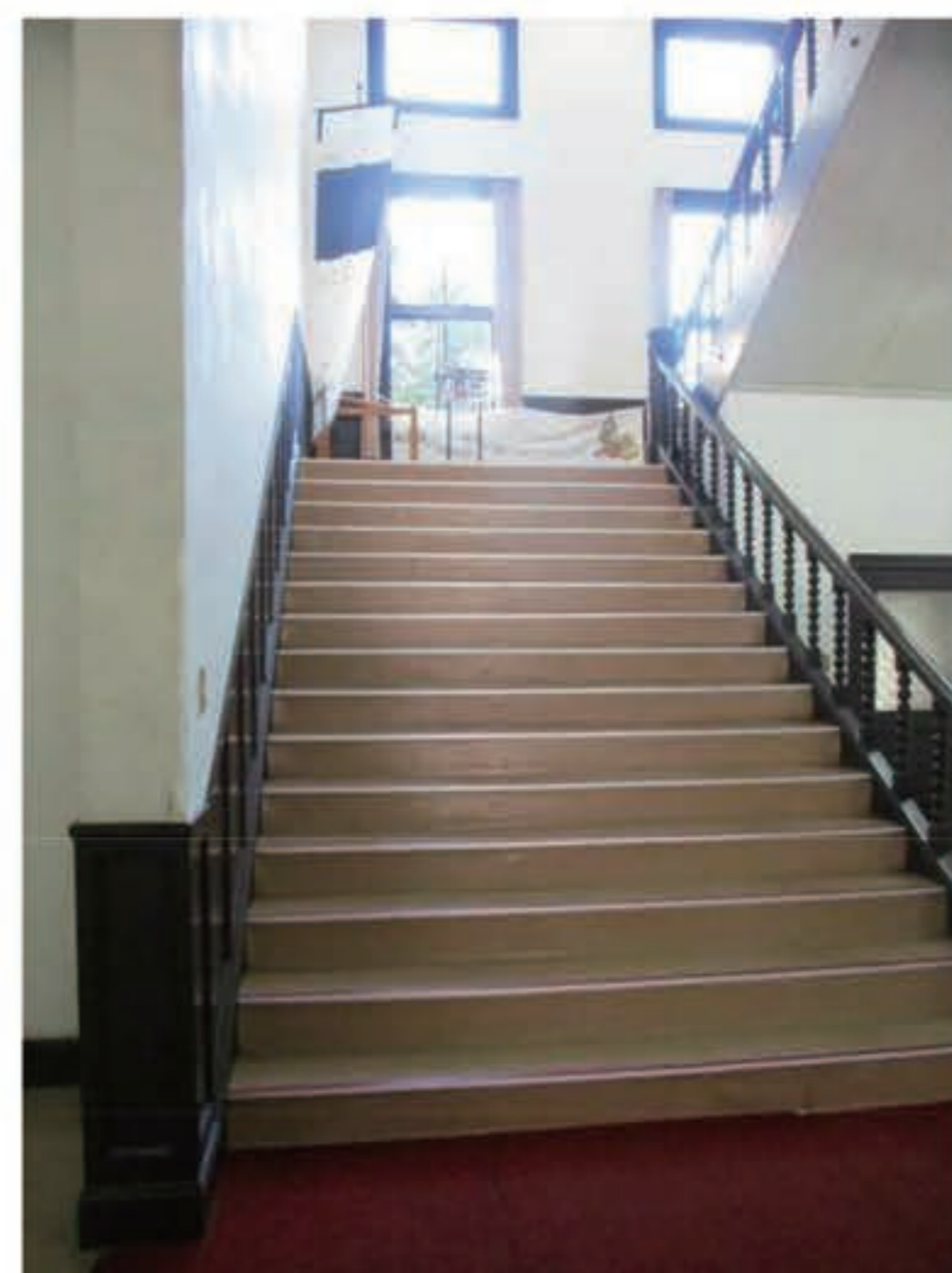
一階では、桐生織のほか、織物関係のいろいろな製品が販売されています。



二階の織物資料展示室には、織物の機械のほか、桐生織の実物なども展示されています。



小窓のステンドグラスは、当時のもの。



手すりのデザインが美しい階段。

